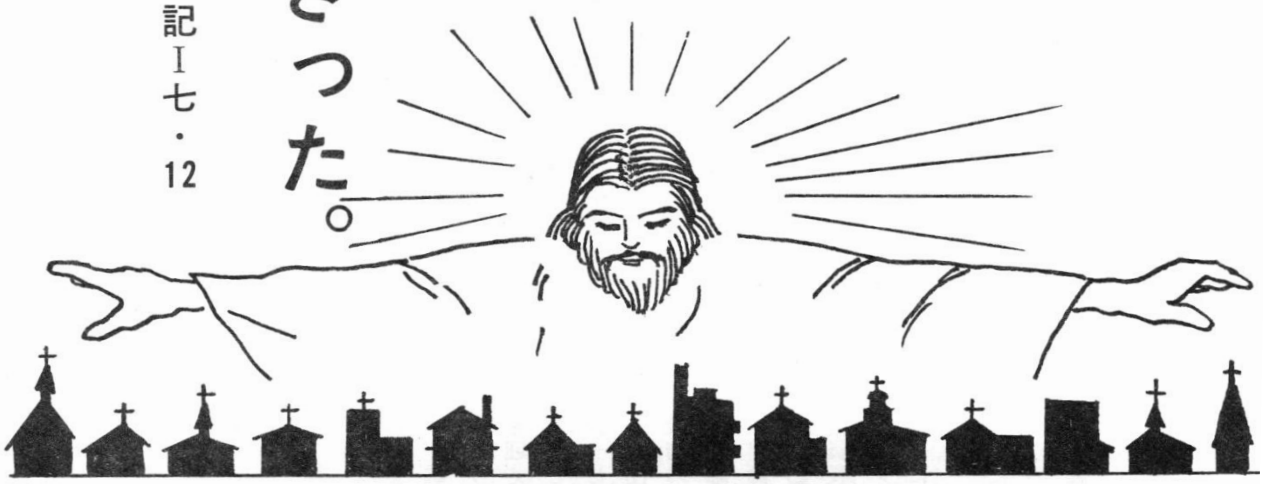
創立二十五周年記念アルバム

日本聖契キリスト教団の歩み

ここまで
主が
私たちを
助けてくださった。

サムエル記Ⅰ七・12



目次

教団の歩み　石田和男　1
「聖なるもどかしさ」　R・サービン　2
カベナント教会の諸原則　3
写真（教団諸行事）　4
諸教会の歴史　5
写真（諸教会）　14
信徒の証詞と意見　15
教団施設（赤城キャンプ・聖契神学校）　18
写真（神学校今昔）　20
教団諸統計　21
統計解説、将来への展望　28
教団地方教会一覧表　29
宣教師家族　30
編集後記　31

日本聖契キリスト教団の歩み



教団委員長
石田和男

そこでサムエルは一つの石を取り、それをミツパとシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、「ここまで主が私たちを助けてくださった。」と言った。（サムエル記Ⅰ　八ノ十二）

一九四九年、米国福音カベナント教会は、最初の宣教師ロバート・バメー師を日本に派遣し、日本における宣教活動を開始し、同年十一月、「日本カベナント宣教会」が組織された。

そして二年後の一九五一年五月、日本聖契キリスト教団の前身である「日本カベナント教会」が設立された。前者はメルボルン・メトカーフ師を委員長とする米国人宣教師の団体であり、後者は土屋顕一師を委員長とする日本人の団体であった。

設立当時の教会は、東京カベナント（世田谷区、土屋顕一師）、国府津（神奈川県・堀川勇師）、松田（神奈川県・松元茂師）、平塚（神奈川県）、酒匂（神奈川県・ハリー・エンゲマン師）、長岡（新潟県・メルボルン・メトカーフ師）であり、世田谷区松原町には宣教師館があった。

一九五二年十月、日本伝道のために、まず日本人伝道者の育成、訓練が必要であると考えた教団は、東京都目黒区に聖契神学校（ウイリアム・リグマーク校長）を開校した。

一九五六年、教団委員長は土屋師から堀川師に交代したが、この間の諸問題のため、東京カベナント教会と土屋師は、教団を離脱することになった（五八年）。

一九六四年、今度は堀川師が教団を離れ、牧瀬雄吉師が委員長となったが、これもまた不幸な出来事によって教団を辞めた。それは急速に成長した私たちの教団が、それ故に受けねばならなかった激しい戦いであり、試練であった。

しかし一九六七年、教団は新しい時代の到来を迎えた。それは日本カベナント教団と日本カベナント宣教会とが合一して、新しく「日本聖契キリスト教団」が誕生したことである。最初の委員長にはルイス・ジェンセン師が、二代目にはM・メトカーフ師がそれぞれ就任したが、一九七〇年、石田和男が三代目の委員長となって、「日本の伝道は日本人の手で！」という基本方針が軌道にのってきたのである。

また一九六九年には、地方教会と教団の自給自立の方針が確立し、一九七四年より実施されることになった。

創立以来二十五年、この四分の一世紀にわたる年月は、実に激しい戦いと、困難とにみちた日々であった。土屋、堀川、松元三師はすでに地上での戦いを終えて天に帰った。東京カベナント、国府津の両教会も教団を離脱した。

しかし今、わたしたちの教団は、十三名の日本人牧師、十二名の米国人宣教師、十四の自給教会、五百名の会員、そして一つの神学校とキャンプ場をもつ団体に成長した。二十五才の青年となったこの教団は、いよいよ、これから充実し、成長、発展する時期を迎えたといえよう。

キリストにあって日本を愛し、日本の救いのために祈り、宣教師を派遣し、多くのささげものを以て、私たちをはぐくみ育ててくださった米国福音カベナント教会に心から感謝の意を表したい。

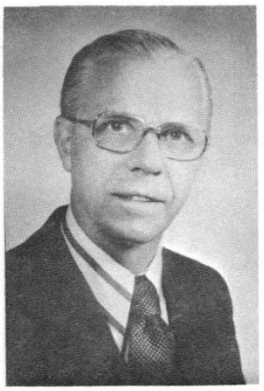
二十五年間、豊かなる祝福と恵みの中に、私たちを守り、ここまでお導き下さった生ける主に、心からの感謝と賛美を献げると共に、この主にあって、更にたくましく前進していくものでありたい、と願い、祈るものである。

「聖なるもどかしさ」

米国福音カベナント教会
世界伝道部長
ラッセル・サービン

親愛なる日本聖契キリスト教団の皆さんへ創立二十五周年を心からお祝い申し上げます。このような記念すべき年にあたり、過去をふり返り、現在を評価し、未来のヴィジョンを新たにすべく考えるというのが、ならわしになっています。

私たちは教団の基礎を築いた初期の頃の人びとを憶え、感謝したいと思います。それらの人びとのヴィジョン、献身、そして根気ある労苦が、後に続くものへの模範を残し、今日のわたしたちの意欲をかきたててくれているのです。



彼らの証詞を通し、多数の人びとがイエス・キリストを知り、信じ、そして新しい生命を見出していったのです。

過ぎ去った二十五年間は、日本においても世界においても、多くの変動を経験した時代でした。こうした変動は、教会にも多大の影響を与えましたが、それと共に、福音宣教のための沢山の機会を提供してくれたのです。この大いなるチャレンジに応えるべく、信仰と経験と目的とにおいて、成長しつづけておられる、日本聖契キリスト教団の信徒、教職者、指導者の方たちに、心から感謝の意を表します。交わりの中に成長、発展した力と愛は、キリストに従い、喜びを以て主のわざに励むことを可能にさせて下さるでありましょう。

将来は皆さんにとって未知のものとはいえ、確信と希望とを以てそれに向っていくことができるのです。何故なら、皆さんの信頼は、はじめからおわりまでを知り、世界をみ手の中に保っておられるお方に寄せられているからです。キリストを受け入れ、救いの喜びを味わった人びとを見させていただくことぐらい、心を深く動かされるものは、他にありません。内に向って成長し、自己満足に陥る、小数グループのクリスチャンという在り方にとどまりたい、との誘惑に勝って下さい！　会員数と教会数において成長するのを、教団が見ずにはおかない、という「聖なるもどかしさ」を、神が皆さんに与えて下さるよう、祈って下さい！　この創立二十五周年の記念の時にあたり、キリストとそのみわざのために、皆さんは新たなる献身へと召されているのです。

これからの二十五年間は、日本聖契キリスト教団にとって、会員数ばかりでなく、クリスチャン生活、奉仕と伝道の質とにおいて、大いなる成長と発展の時代となるように、というのが私の祈りです。皆さんのお祝いの時が、感謝と霊的更新と新しいヴィジョンとキリストへの献身のための時でありますように！

「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」

（ピリピ一ノ六）

日本聖契キリスト教団の生みの親である、米国福音カベナント教会は、宗教改革、スェーデンにおけるルーテル国教会の聖書的教育、十九世紀の信仰覚醒運動の影響の中から形成され、発展してきたのである。信仰的立場は、教会規約序文に表明されているが、その解説である「カベナント教会の信仰の諸原則」（一九七二年版）の小冊子を抄訳して紹介したい。その目的は、敬虔主義の流れの中にある、信仰の遺産の価値を新らたにし、自らの信仰的立場を確信することにある。

カベナントの信仰の諸原則

一、われわれは聖書を信じる。

カベナント教会は、旧新約聖書を神の言であり、信仰、教理、行為の唯一かつ完全な規範として信じる。これは聖書が、静的で非弾力的な物指し以上のものであることを意味する。神の言は霊であり生命であって常にわれわれからの生ける応答を求める。

この信仰は、凍った態度ではなく、神と神の御言への真実さに信頼する冒険であり、教理は、化石化されたものではなく、聖霊の導きによる御言への探険であり、行為は、社会的圧力にただ服することではなく、神の御心に従って、光と新しい生活の中を歩むことにある。

二、われわれはキリストにある生命を信じる

会員となる資格は、神の御子、われらの主イエス・キリストを信じる信仰により、生ける望みに新生し、三位一体の神の御名によって受洗し、クリスチャン生活をおくるように委ねた人に、与えられる。

聖書の根本的諸事実に知的同意をなしても、キリストにある生命にあずからないこともあり得るし、良い信仰告白をし、良い評判を博しても、キリストとの交わりにあずからず、霊的に死ぬこともあり得る。救いと永遠の生命に至る唯一の道は、イエス・キリストのご人格と、あがないの御業を個人的に信じることにある。（ペテロⅠ　1ノ18～19、ヨハネ14ノ6）

三、われわれは献身した生活を信じる。

われわれの信仰告白の根本的強調は、神の御心への献身である。すなわち、われわれの主であるお方を喜ばせることにある。である故、もはや闇の中を歩まず、福音の光の中を歩み、生活が輝いてくるものとなる。

（ガラテヤ2ノ20）

四、われわれは凡てのクリスチャンの一致を信じる。

聖書は分裂した教会を認めていない。使徒の働きは「救われた凡ての人々が教会に加えられた」と告げ、パウロの手紙も「凡ての聖徒たちへ」とのべている。御言に基き（詩篇119ノ63参照）、キリストが受け入れた凡ての人を会員とすべきであることを信じる。教理の微妙な相違、洗礼の様式や預言解釈の違いは、異なった教会を必要とせず、分裂もまた、すべきではない。大祭司キリストの祈り（ヨハネ17ノ20～21）参照。

五、われわれは、霊的交わりの訓練の中にある、自由の原則を信じる。

カベナントの教会政治の形態は会衆制で、地方教会及び信徒個人の独立性を保証する。しかし、この自由は責任不在とは同じではなく、神の言の中心性や霊的



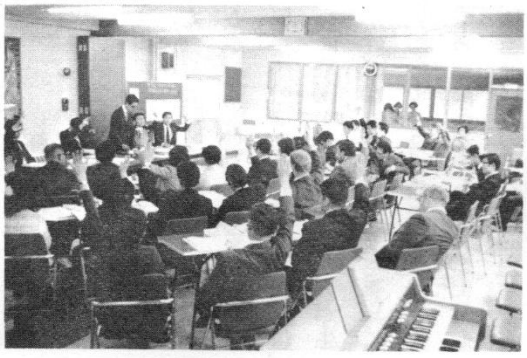


社会の相互責任、また訓練を無視する個人主義とは区別されるべきである。

六、われわれは福音の証しを信じる。

この証しは、伝道、キリスト教育、宣教師活動の中に表明されるべきものである。人々をキリストに導くことが教会に与えられた第一の使命である。伝道は奉仕の部門ではなく、われらの働きの凡てを特色あらしめる精神である。絶えず伝道することによってのみ「福音的」であり得る。教育においては、最高の真理であるお方との出会いを経験させることが肝心である。宣教活動は、内外を問わず、目的とすることは滅びの中にある人々に、生ける御言をもたらすことにある。





七、われわれは主なる救主イエス・キリストの永遠の王国を信じる。

教会は、しばしば惑わされ、弱くまた敗北したかのように見えるが、これが凡てではない。キリストが地上におられた時、弟子たちに与えた教会建設（マタイ16ノ18）と、御国の到来の約束は、今も堅く、真実であることを信じる。それ故「国と地と栄えとは限りなく……」と待望する。（エペソ1ノ10　フイリップ訳）



諸教会の歴史

（北部地区）

長岡教会



新潟県下唯一の戦災都市として荒廃していた長岡市に、W・リグマーク、M・メトカーフ両宣教師が赴任したのは、一九五〇年十二月八日であった。当日は市長をはじめ、市の主だった人々が駅頭に一行を出迎え、公会堂において歓迎式典が行われた、と記録に残っている。以後、宣教活動が開始され、学校町の現在地に約二三〇坪の土地が購入され、当時としては市民の注目を浴びた洋館の宣教師館がたてられた。活動は長岡市のみにとどまらず県下全般におよんだと聞いている。以来ウェストバーグ、エンゲマン、ジョンソン宣教師が責任者として奉仕され、協力伝道者としての飯田和子師（現石田師夫人）の赴任（一九五五年）を皮切りに、塩田達男師（一九五九年）、島田早苗師（一九六一年）が労された。一九六三年、メトカーフ師が長岡教会を離れて後、日本人牧師に責任が委ねられた。角本行巨師が一九六六年に赴任され、聖契白百合幼児園と中学生学習会が始められた。教会には多数の中高生、青年が集まったが、その中から献身者が起こされ、現在、牧師、牧師夫人として活躍し、神学生として学んでいる者がいる。



一九七〇年から日吉牧師が赴任し、苗床教会としての苦しみを負ってきた。地方教会の教会形成は、多くの若者が都会に出て行くという現実の中から考えられなければならないと思う。キリスト教に対する誤解と偏見を持っている人々の厚い心の扉を開かせるためには、第一に時間がかかる。働き人が生涯かけて働く必要がある。第二に幼児園のように未信者が気軽に入って来られるような接点を、教会が積極的に作って行く必要がある。第三に、これが一番大きな課題であるが、証詞の出来る信者、特に家族ぐるみの証人が起こされていく必要がある。

以上の三つの点を考慮して、長岡聖契キリスト教会は、今後の教会形成と宣教の拡大をしていきたい。

渋川教会

渋川に伝道が開始されたのは一九五五年でまず土地を購入して宣教師館を建て、R・バメー師が着任し、天幕集会、公民館集会を開始した。翌年には定期集会が公民館でもたれるようになり、一九五七年には最初の受洗者が与えられた。

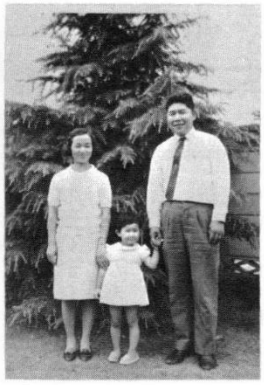
その頃、群馬県北部に数多くある施設に伝道する使命を感じ、療養所二ヶ所、児童施設二ヶ所、女子更生施設一ヶ所を巡回して宣教にあたった。療養所と児童施設計三ヶ所での働きは、現在も継続されている。

一九六二年、必要に迫られて約十二坪の教会堂を宣教師館に隣接して建設した。教会活動は公民館から教会堂に移り、聖日礼拝、祈禱会、伝道会、教会学校が行われてきている。

現在までに奉仕された教職者は、宣教師四名（バメー、クリステンセン、エンゲマン、クリスターソン）、日本人教師五名（堀田、島田、

岩本、高橋、上原）であり、神学生四名（伊藤、大原、山極、川村）も遣わされた。

約二十年の歴史の中で多くの人人が福音を聞き、主イエスを信じたが、転居などにより教会を去った。信徒の年令層は各層にわたっているが、最近の求道者中には年輩者がいず、数多い若い求道者たちも、近い将来には進学や就職のために、都会へ転出することが予想されている。



これからの展望としては、地元に確実に定着する信徒を獲得することが必要で、非常に保守的な考えの強い地方である故、忍耐強く伝道しなければならないが、そのために祈り、具体的な計画を立てて活動するよう、導かれている。

前橋教会



一九六三年、H・ウェストバーグ師による開拓伝道によって当教会は始まった。翌六四年初め、赤城山頂に宣教会によりキャンプ場が購入されたが、夏のキャンプに参加し、決心した青年たちが一団となり、宣教師と共に働き、教会形成へと進んだ。やがて前橋クリスチャン・センターとして発足し、教会学校三〇名、礼拝十五名の出席を見るに至り、キリスト教文書の販売も行ない、吉井町でも聖書研究会が開かれた。六五年にはインターンとして遠藤神学生がつかわされた。

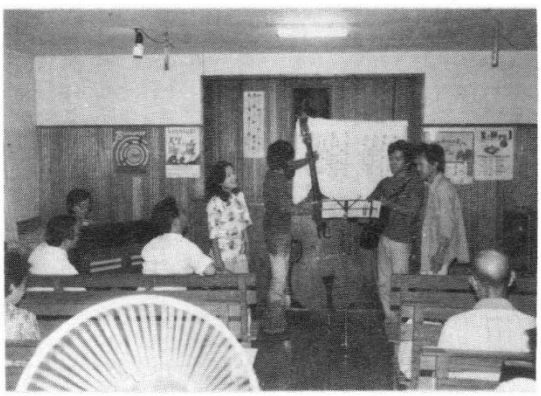
六六年になるとクリスターソン師が着任し三年間の伝道の最初の実として、先ず二名の姉妹が受洗し、続いて教会に加えられるものが起こされた。六七年に宣教師がクリステンセン師となり、六八年には、日本人伝道者として松本芳三師を招聘し、今日に至っている。

当教会の特徴は、初代の宣教師以来、伝統的に進取の気性にあると自認している。

数年前、教会の目前に群馬経済の中枢機関であるG銀行本店が建られたが、うわさによると将来人口一五〇万の群馬市がここを中心に計画されているとのこと。そこで展望としては、この地域に恥しくない構想として、分身教会五つを建設したいと願っており、今日もこの構想実現のため、福音の宣教に励んでいる。



高崎教会



一九五六年十月、G・ジョンソン師が高崎市貝沢町の宣教師館において伝道を開始した時から、約二十年にわたる高崎教会の歴史は始まった。玉村師及び松下神学生の奉仕もあり、翌五七年夏には市の中央において集会も開いた。

五八年の一月には、三名の姉妹が最初の受洗者として与えられ、イースターには貿易会館で特伝を行ない、十七名の決心者が起された。同年八月下旬より九月上旬に

かけて、浜尻団地で聖契神学校伝道チームを迎え、天幕集会を開き、決心者七名、求道者数名が与えられた。十一月には浜松より鈴木武雄師が赴任された。

一九五九年三月一日、正式に教会の組織化を行なったが、意見の違いからジョンソン師は駅近くの消防署の二階に集会を移し、鈴木師の方は、S姉宅を礼拝所として使用するようになった。

六〇年十月、牧師の辞任に伴い、十一月から吉田神学生が奉仕のため派遣されていたが、間もなくL・ピーターソン師が着任され、祈りと汗の労苦の中に、飯玉町九一番地に、新会堂が、六二年九月九日、献堂された。この間、柴田神学生も協力をなした。

一九六四年に上原義次師が赴任し、四年間の奉仕がなされた。六八年、高橋正行師が渋川より着任し、現在に至っているが、主が小さな教会にも、人々を導いて下さったことに感謝している。信仰の仲間が、主の御霊により、初代教会の弟子たちのように、熱く燃え、力強く内から外に向かって出て行けることを、心から願っている。



（東京地区）

新秋津教会



新秋津キリスト教会（一九七六年五月名称変更）は、一九七一年十月三十一日に、十二名の会員により設立された。その五年前、一九六六年三月、当時の宣教師館（バメー宣教師）で日曜学校が開かれ、四月から神学生の協力が与えられた（これは昨年まで続けられた）。丁度一年後、礼拝が始められ、イースターに初穂が与えられた。その後六月に、バメー宣教師は帰米、武蔵野線布設のため宣教師館がこわされることとなり、その後地にプレハブの会堂が建てられ、礼拝は守られていた。一九七〇年、清瀬よりウェストバーグ宣教師が協力奉仕され、翌七一年、中根れん伝道師が赴任され、伝道は前進した。こうして、これら二人の先生を迎えて、教会設立がなされたのであった。

それ以後、ウェストバーグ宣教師は七二年六月帰米され、メットカーフ宣教師が主任牧師として九月に赴任された。そして、中根れん師が七三年四月をもって寒川教会に転任され、その代り梅田与四男伝道師が副牧師として招聘され、四月赴任された。それから、メットカーフ牧師と梅田副牧師の協力奉仕が始まり、その年の年会において自給を決議し、三年間が過ぎた。一九七六年五月から、メットカーフ師は清瀬開拓伝道のため主任牧師を辞任され、梅田師が主任牧師として迎えられ、現在に至っている。

設立以来五年近い歴史を迎えているが、活発な婦人会と明るい青年の交わりが祝されて来た。現在、

牧師の入れ変わり後で、教会が「平安を保ち」続けることが何よりも必要な時である。しかし、主を愛し従う群として、「主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行」く教会（使徒九・31）となりたく祈っている。今年は、設立五周年を迎えるが、これまでの主の恵みに感謝し、その記念を残し、十周年を教会堂建設の年と目ざして、主にいよいよ大きな祝福を祈って行く決意である。



目黒教会

一九五二年十月、東京都目黒区中目黒に開校した聖契神学校は、ウィリアム・リグマーク校長と三人の女子神学生（その内の一人は現在の石田牧師夫人）によって、そのクラスルームの中に集会を開始した。

そして二年後の一九五四年三月二十一日に、その集会は、目黒カベナント教会として組織された。初代の牧師はウィリアム・リグマーク師、会員は二十名であった。



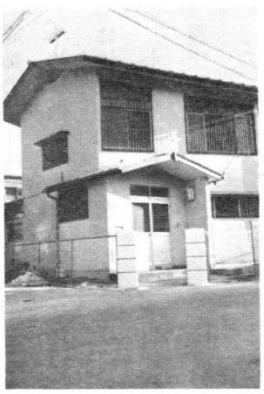
一九五六年一月、神奈川県小田原市の国府津教会の牧師だった堀川勇師が、聖契神学校の学監になられると共に、二代目の牧師として就任された。

堀川師は、教団の委員長として、また学監、牧師として、大いに活躍されたが、特に目黒教会が、聖契神学校から独立し、自給自立の教会になることを計画され、二年後の一九五八年八月、現在の目黒区中町一の三四の十一の地に、約八十坪の土地と二十坪の家屋とを入手し、移転したのである。

しかし、移転後の運営について、牧師と教会との間に意見が分かれ、堀川師は辞任。三代目の牧師として、一九五八年十月、聖契神学校を卒業したばかりの石田和男師が就任され、今日に至っている。

その間、実に沢山の事件があったが、神以外の何ものにも依存することなく、歩み続けることができたのは、ただ主の恵みと憐れみである。

一九六六年九月、教会は七五〇万円で延五十五坪の新会堂を建て、更に一九七五年九月には四五〇万円で八坪ほどの増改築を行なった。また一九七二年四月二十五日には、東京都知事より、宗教法人の認承もうけた。



現在五五名の会員、礼拝出席平均五十名であるが、礼拝出席百名の教会をめざして祈り進んでいる。

私たちを覚え、祈り、献げ、援けて下さった人々を覚え、私たちもまた、祈り、献げ、援ける教会に成長したく願っている。

（神奈川地区）

鶴見教会



故堀川師の家庭訪問が発端となり、一九六四年（昭和三十九年）、平塚教会の臼井勲、弘両兄弟が、鶴見の闘病中の叔父さんを訪れ、雑誌、テープなどを通して福音を証ししたが、間もなく叔母さんの飛田、臼井両姉宅で家庭集会が開かれ、数名が集うようになっていった。約二年間、このような状態が続き、牧瀬、角本両師及び当銘神学生がそれぞれ奉仕にあたられた。一九六五年四月には、聖契神学校の伝道チームによる特別集会も近くの町内会事務所で行われ、その年のクリスマスには、平塚教会で四名の兄姉が受洗した。

当時の教団行政委員会で、家庭集会の成長に伴ない、専用集会所の必要性が強く主張された結果、諸先生方の労苦の下、カベナント宣教会の資金約三五〇万円余で家屋付土地四十三坪が現在地に購入された。ジェンセン師が責任者となる一方、前記の臼井弘兄（現改革派教会牧師）が大学へ通う傍ら、会堂に寝泊りして、諸集会を担当した。

六六年十月、米国留学から帰国した伊藤師を迎え、正式に鶴見聖契キリスト教会が組織された。

初期には神学校伝道チームの応援と、臼井、宮田、小宮、高橋、新保の五名の神学生による奉仕がなされた。

ドル・ショックの一年前にあたる一九七一年十月、パサディナ第一カベナント教会からの特別献金、米国福音カベナント教会からのローン及び自己資金若干を基金に、二階建ての会堂、牧師館が献堂された。七三年には教団よりの七年間にわたる財政的援助に感謝しつつ、自給を達成した。



宣教開始十周年記念を迎えるにあたり、第一種教会昇格、第二教会開拓、数多くのクリスチャン・ホームの建設を目指しつつ、更に飛躍的な成長と発展を遂げていきたいと、祈りつつ願っている。

湘南台教会

（同年五月）

一九六九年当初より、藤沢市郊外の湘南台（小田急線）に開拓伝道をする計画が起き、諸先生方の労苦による調査の結果、駅近くに六十五坪の土地を購入した。

七二年五月十四日には牧師館兼集会室の献堂式が行われたが、資金は米国福音カベナントからの指定献金で、特に建物のためには全米の夏期聖書学校の子供たちによる献金が宛られた。小宮惇師が神学校卒業後、直ちに赴任し奉仕にあたったが、翌年末に辞任。

七四年一月、ウェストバーグ師が茅ヶ崎教会と兼任で、土曜学校、日曜礼拝（午後）の集会を担当した。同師の離任後、七五年六月から守本神学生が引き継ぎ、クリスマスには最初の受洗者が与えられた。

七六年四月より、茅ヶ崎教会の責任で伝道が行われることに決定した。

茅ヶ崎教会

一九五七年六月、R・クリスターソン、S・リンストローム両婦人宣教師が、近所のひばり幼稚園を会場に借りて、教会学校を開いたことにより、伝道が開始された。八月には中高生対象の聖書研究会が行われ、高野進神学生も派遣されて奉仕にあたった。十月には松元師を迎えて特伝がもたれ、決心者二名が与えられた。この特伝により附近の人々に伝道所の存在が認識され、諸集会が盛んになっていった。

翌五八年には玉村師が婦人伝道師として着任し、七月には最初の受洗者一名が、特伝の実として与えられた。五九年には隣接の寒川町にも伝道を開始し、クリスマスには四名の兄姉が受洗した。

六〇年の夏には、エンゲブレットソン師（現米国福音カベナント教会委員長）を迎え、寒川において近隣諸教会の応援を得、特伝を聞き、六名の決心者が与えられた。加藤神学生も夏の間、茅ヶ崎、寒川の双方で奉仕にあたった。同年九月K・ランデル師が赴任し、十一月にはクリスターソン、リンストローム両師が帰米した。六二年夏、ランデル師が離任した後、九月にG・ジョンソン師が来られインターンの長谷川神学生と協力伝道を行ない、六三年の秋には隣接の小出の地で特伝を行なうなど積極的な活動をなした。

六四年には中根師が婦人伝道師として着任し、児童伝道に力を入れられた。六五年九月二十六日、



会堂が献堂された。

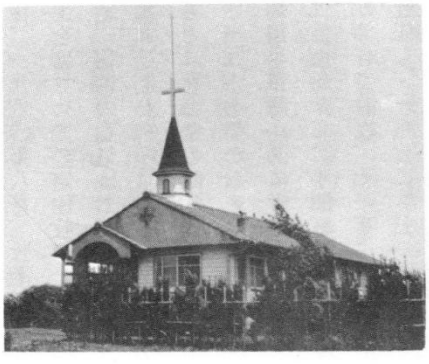
ピーターソン師（六七～六八年）、ジョンソン師（六八～七一年）の奉仕の後、教会内部より「自立を計って日本人牧師を迎え、一層の発展を期そう」という声があがり、七一年に安達忠師を招聘し、七二年四月十六日には、第二会堂の献堂式を行なった。翌七三年には経済的自給を達成したが、十月に安達師が辞任され、以後、ウェストバーグ宣教師が引き継ぎ、今春より守本愛子師が赴任した。教会内の雰囲気は落ち着いており、新たなビジョンのもとに一致協力して発展を祈っている。



寒川教会

一九五七年六月茅ヶ崎市に、日本カベナント宣教会は土地を購入したものの、近くに既成の教会が多いことから、寒川の地に伝道すべく導びかれたと言うことである。

一九五九年五月、R・クリスターソン師（一九五九年五月～一九六〇年九月）は、寒川駅前の古く小さい公民館を借り、毎週大人と子供の集会を開いた。翌年、K・ランデル師（～一九六二年六月）は、この宣教の業を引継いだ。この間一時集会場を、森下住宅の一隅に



移したこともあった。一九六二年九月、G・ジョンソン師（～一九六七年六月）が、後任として来日し、一九六〇年以来ランデル師と協力伝道していた長谷川師（当時神学生）と祈り合い、協議の結果、集会場をもとの公民館に移し、夕拝と英語クラスを開始した。しかし何分借物であることの不便から、伝道活動に種々の支障が生じていた。その頃、『伝道の武器である我々の会堂が欲しい』という切なる願いが起され、具体的に会堂建設を目指して一円献金が始められた。一九六三年に宣教会は土地を購入した。ジョンソン・長谷川両師は土地探しに奔走したが、最善の神の導きを得て地元の若菜・三留両氏から現在の土地の斡旋があり、教会所在地としては最も理想的な丘の上に与えられた。一九六四年四月、過去二ヶ年間神学生として茅ヶ崎、寒川で奉仕された長谷川師を正式に牧師として招聘した。一九六四年六月六日、E・C・C・Aよりの献金と教会のローンを以って会堂が建られた。以来教勢が伸長する。一九七〇年、自給（第一種）教会となった。一九七一年、牧師館が建設された。一九七三年、中根れん師（児童伝道及び訪問伝道）を招聘した。教会の機能である伝道と教育、特に地域への奉仕に対する強調のため、一九七四年以来、短期宣教師を招聘することを年会で決議し、英語教室を継続している。



ヴィジョン

元国幣中社、寒川神社を擁する門前町（人口三万）に一つしかない教会として、福音を土着させると同時に、隣接する市町の福音未伝地を開拓したいと願っている。

平塚教会

一九四八年、国府津基督教会牧師、堀川勇先生が平塚西海岸に家庭集会をもち、教会活動を開始し、一九五一年、日本カベナント教団平塚教会を設立。一九五六年一月、ハガイ書一章十八節の御言により教会堂建設を決議した。同年三月、富士キャンプ従軍牧師ウィリアム・J・ライト先生を通じ米国アイオワ州のメソジスト教会から五十四万円の献金がささげられ、これを基金に百五十坪の土地と十五坪の家屋とを松風町に購入した。



神学生たちによる奉仕が続いた後、一九六〇年八月、牧瀬雄吉先生をはじめての定住牧師として迎え、信仰の意気はさかんとなり一九六三年十一月、大いなる感謝のもとに新会堂の献堂式を行なった。

一九六七年からメトカーフ師、島田早苗師が共に労をとられ、一九六九年から二年間、角本行巨師が奉仕された。七一年に夏村師が赴任し、一九七二年十一月、牧師館を献堂、七四年八月、宗教法人となり、日本聖契キリスト教団規則による第一種教会として今日に至っている。

教会の強調点は、教会聖句ともいうべき、「まず神の国と神の義とを求めなさい。」（マタイ六章三三節）にあり、クリスチャン・ホームの玄関、柱に右の聖句が臼井昇兄の達筆で大書され、かかげられている。そして「聖日厳守」が教会全体のモットーである。

教会員は㈠礼拝、㈡伝道、㈢聖書、㈣祈禱、㈤献金。以上五原則を以て教育されている。教会員は十代から八十代とすべての年代を

網羅しているところにも一つの特色がある。

将来の展望としては、礼拝出席五十名、伝道夕拝二十五名、祈禱会十五名を目標に、教会の部活動による伝道、奉仕を展開することである。宗教法人を設置しているが、組織は可能な限り簡略化し、「私たちの教会」という会衆制による明るく秩序ある運営、海外、国内伝道の支援等、他に奉仕できる教会形成にはげんでいる。

松田教会



松田教会は一九四九年頃、当時国府津教会の副牧師であった松元茂師が、杉本春吉兄を伴ない開拓伝道をされた結果、五〇年に会員五名を以て組織された。翌年には小さな牧師館が建られ、更に一九五二年、開拓という幾多の困難を克服し、小さいとはいえ、魅力的な教会が献堂された。その頃の新聞には「足柄上郡初のキリスト教会が建った。」と報道されたほど山の地域の伝道は成功したようである。

それに伴い宗教法人の認可申請を行い、一九五五年二月宗教法人松田キリスト教会が発足し、五七年には会員は五十一名と増加した。



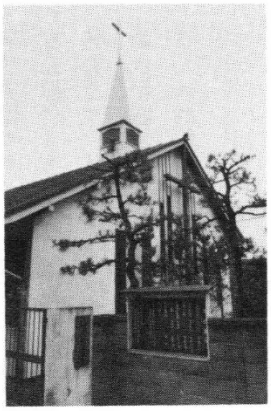
その後、松元師が宣教師として台湾へ行かれるようになり（六三年四月）、牧会上の問題もあって教勢は急速に衰え、教会の機能を充分果せない状態となった。直ちに着任された佐藤勇師（十一ヶ月）、続いて赴任された角本行巨師（二年）及び島田早苗師（一年半）がそれぞれ再建の荷を負われたが、果せずに去られた。

一九六七年六月、恒見（旧姓高橋）美重子師が無牧の教会に導かれ、残された信徒三名の熱心と松田への使命が良き志となり、再建は遅々たる歩みではあったが始ったのである。まず牧師館改築及び会堂修繕に着手（六七年七月～十一月）し、また宗教法人としての義務を果すべく代表役員の変更及び教会規則の全面的変更がなされ、県の認可を受けたのは六八年八月十六日であった。

一方、教勢の方は、六七年十一月初めての求道者荻野治久兄（現役員）が導かれ、翌年受洗してから、六九年二名、七〇年三名、七二年一名、七四年二名、七五年一名、七六年二名と受洗者が起され、家族のような教会が形成されていったのである。

教会はキリストの体であり、愛に溢れる教会でありたく願っているが、その愛とは十字架の愛である。本当にキリストの愛に目覚めた者だけが用いられる教会でありたいと願うものである。

酒匂教会



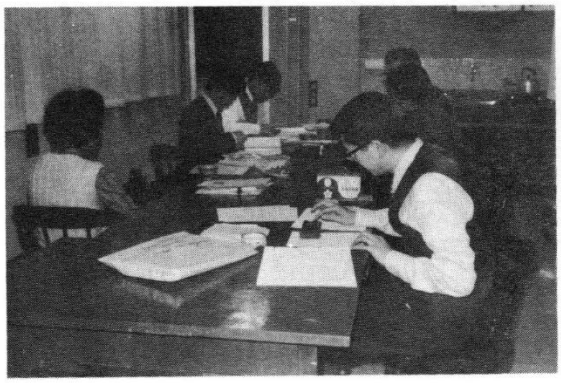
酒匂は当初から神奈川県の宣教師活動の中心となり、一九五〇年にE・ネルソン師が離任して以来、H・エンゲマン師(五〇～五二年)、G・ジョンソン師(六ヶ月、病気のため帰米)、M・メトカーフ師(五三～五九年)及びR・クリスターソン師が奉仕にあたったが、国府津との関係もあって、独自に教会組織はもたなかった。六四年九月、H・ウェストバーグ師の在任中に、礼拝が開始され、続くクリステンセン師の時に「酒匂キリスト教会」が発足(一九六五年)したが、新垣神学生もインターンとして奉仕した。

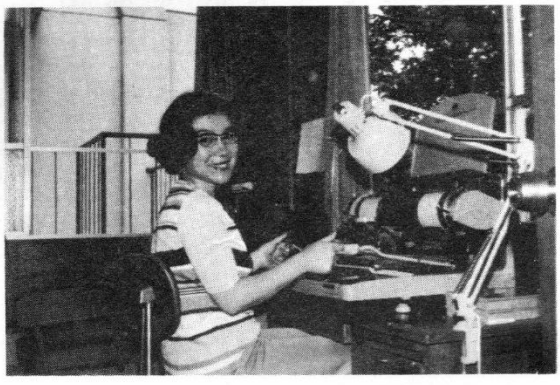
六六年にメトカーフ師が着任し、翌年には日本人伝道者として岸義紘師が招聘され、六八年六月二日、新会堂の献堂式が行われた。岸師の米国留学後、七三年からはジョンソン師が着任し、五名の会員で始まったのが、現在は七五名にまで増加して恵まれている。

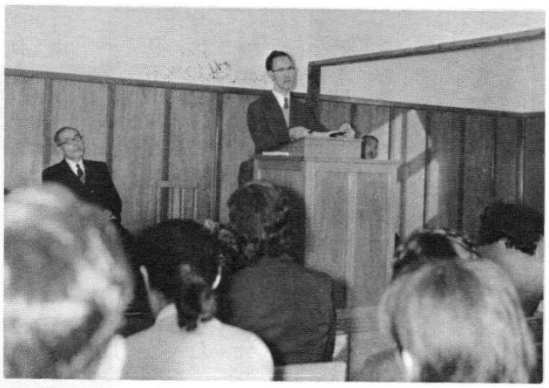
従来は、英語教育を通しての活発な伝道がなされ、多くの魂が導かれたが、今日では英語のみならず、音楽、個人伝道に積極的であり、多くの人々が救われている。毎年必ず数回の特別伝道集会を開くことが決定しており、恒例の行事としては教会大運動会、青年バイブル・キャンプがある。若人の多いことが一つの特色であったが、主婦をはじめ社会人が多く集められ始められているのは感謝。昨年度行われた集中方式伝道の実も多く結ばれており、数年前からの霊の覚醒を求める祈りも引き継がれている。「祈りの教会」「キリスト・イエスにあって成長する」が中心テーマとなっている。

将来の計画として、地域に密着した教会となるため、種々の教育活動、社会活動の充実発展を期し、そのための会堂再建も考慮中で、「地の果てまでキリストの証人となる」ため、一同祈りつつ進んでいる。















信徒の証詞と意見

「教団と共に歩んだ二十五年」



教団の最長老であられる平塚教会の臼井昇さんに、古き昔の思い出などをお聞きしました。（聞き手、梅田）

――・クリスチャン生活は今年で何年になりますか。

臼井・四十六年です。

――・入信の時の思い出をお聞かせ下さい。

臼井・入信の時は一九才でした。駿河台の神田ホーリネス教会で伝道会に出て中田重治先生の説教を聞き、内容は解らないながらもキリスト教はいいものだなあ、と強い印象を受け、教会に行きたいという思いを抱きました。後に深川の木場にある教会の早天祈禱会に導かれ、一年後には洗礼を授けて頂きました。

――・人生で大きな決断をされた思い出は。

臼井・熱心に教会に行っていた私ですが、会社の仕事があまり忙しくて、だんだんに教会から足が遠のいてしまいました。しかし、その後肋膜炎にかかり会社を離れますと、会社は戦後大きくなって行くし自分は病気になるしで、人生の悩みを感じ又教会に導かれました。その後、平塚で床屋を開業しましたが、五人の子供が次々と病気にかかり、その看病疲れから先妻が亡くなりました。死の直前に、本当にイエスさまを信じているかと聞いた時、家内が苦しい息の下でうなずきました。その時、「神は愛なり」との〝声〟を聞き、厳粛な気持になり、私自身も神に対する確信を与えられました。先妻が召されたのは貧乏のために子供達が病気になったためでしたが、それほど貧乏になったのは、床屋にとってかき入れ時の日曜日を休業にしたためでした。聖日厳守は信仰の試錬でしたが貫き通しました。それで、やがて大きな祝福を受け、店もだんだん大きくなって来ました。信仰の決断とあかしだったと思います。

――・平塚の教会員になられたのはいつ頃ですか。

臼井・昭和26年に教会員になりました。教会の草分けといわれる三上さんを助けて、教会のために努力したわけです。

――・その頃の教団の様子をお聞かせ下さい。

臼井・その頃は、教団の一番の成長期だと思いますね。その成長期の花形ともいえるのが箱根の修養会で、当時は長岡教会からも遠い所を皆出かけて来まして、非常に恵まれました。

――・教団も二十五周年を迎えた訳ですが、その一番古い頃からの信者として、教団の歴史と信仰生活をふり返って一言どうぞ。

臼井・我々年よりの目から見ますと、教団の大きな集まりの中に、〝和〟が欠けているのではないかという気がします。もっと〝和〟の精神を持てるようになれば、今の沈滞期より躍進することができるのではないでしょうか。



教団のために、お互いに祈って行く事も必要ですね。大きなリバイバルが教団に又教会に起こる事を、心から期待しています。

「北国の信仰の枝」

山田セツ



北国にぽつんとある離れ島のような長岡教会で長く信仰を守られ、教団に連なる一つの枝としての思い出を山田セツさんに語って頂きました。

救われましたのは、今からもう20年前のことになります。その五年位前、求めて教会に行きました。当時、畑仕事に行く途中、静かな村の田んぼ道で、後から来た一台のジープに乗った外人に一枚の紙切れを渡されました。それは、あとでトラクトというものだと知りました。何が書いてあったか記憶にありませんが、そのトラクトに導かれて長岡教会に行きました。見も知らない方々が温かく迎えて下さり、これが教会という所なのか、と感ぜずにはいられませんでした。本当に忘れ得ぬ場所となりました。静かな小さな会堂でした。本当に質素な会堂、せまい入口、二列に並んだベンチ、講壇のわきにオルガンが一台。講壇の後ろの方にイエスさまの絵がかけてありました。あの会堂は、宣教師の方々によって建てられたものでした。

宣教師の方々は、私達が戦争の時憎んでいたアメリカの方々でしたが、言葉の不自由な日本にイエス・キリストの使者としておいで下さった。その故に、罪からの赦しを頂くことが出来たのだとわかりました。私が教会に行った最初の頃は、ウェストバーグ先生でした。先生は田舎の人が好きだとおっしゃっていました。それは素直だからだと話されるのでした。

その頃、飯田和子先生が長岡教会においでになられたと思います。宣教師と共に少年院の少年たちのために福音宣教をなさっておられました。又、中学生の白百合会も、先生に導かれて主の御愛を受けとめて行きました。

同じ頃、箱根で夏期の修養会が行なわれました。修学旅行の他は汽車に乗ったことのない私を、飯田先生は無理にも連れて出て下さり、そのおかげで幾度も修養会に参加する事が出来ました。長岡からは本当に遠かったのですが、各教会から集って来られた姉妹方によって多くの神の恵みと励ましとを頂きました。また、身体の不自由な姉妹方の主の恵みを頂いた本当に笑顔の生活を見て、感謝のとぼしかった自分の反省とさせられました。あれから十数年、あの時お交わりをした姉妹は今も尚、励ましのお便りを下さいます。



信仰を持つということのむずかしさをしみじみと覚えさせられております。真の神様に来ようとする魂は多くあります。しかし、この土地にある長い間の慣習から自分を切り離すことのむずかしさのためにとまどって、イエス様に来ることが出来ずに苦しんでいる幾人かの方々を知っています。そのために教会は何時も祈らされていますが、時間がかかります。伝道会もやります。しかし、決心者はあっても、何時の間にか一人一人と遠のいてしまわれます。献金のためにつまずきをおぼえられる人も少なくありません。真理を語ったがために自分から離れて行く魂を恐れて語り得ない弱さも、心のすみにあることも確かです。造られた者が帰りゆく所、それは造って下さった神のもと以外にないことを告げて行きたいと思っています。どうか、神様が働いて下さるようにと祈るばかりです。

「教団の成長を祈って」

三上　忍

創立二十五年を迎えた教団について、この教団を愛する一人の教団の信徒として卒直に意見を述べさせていただくならば、まず、二十五年経った教団として過去におけるその成長ぶりはあまり良いものではなかった、ということであろう。私が受洗したのは今から二十年程前になるが、その当時も教団の夏期修養会が行われ、私も楽しみにして出席したものである。そして当時多くの同年輩の学生達が集まって来ていたと記憶している。しかし、現在残念でならないことはその多くの人達がほとんど教会から姿を消しているということである。もし彼等が各教会に残り、教会生活をつづけ、活躍していてくれたならば、どれほど大きな影響力があり、教団は成長していたことであろうか。これは過去における教団内部のもめごと、一部教会の教団離脱や牧師先生方の入れ替り等々が教会に集まって来た人達にその魅力を失わせ、教会から去らせることになったのではないか。米国カベナントの根本原則は「キリストにある信仰を生活の土台とし、そうした者同志が共に霊的な生命の交わりをする。」とあるが、そうした根本原則を忘れてはいないだろうか、否そうしたことを強調しているのであろうか。教会とはキリストを信じる信者の交わりであり教会堂とはちがう、とは良く言われることであるが、このことについても私にはときとして教団の態度が本末転倒しているのではないかと感ずることがある。まず土地、教会堂を求める、というように入れ物を用意するが、かんじんの信徒がほとんどいない。私としては、たとえ開拓伝道であっても小さな集まりの中からその群に加わる者が与えられ、入れ物が必要になった時点で教会堂が与えられるように求めていくのが妥当のように思われる。



教団の年会に私はここのところ毎年出席している。今までは信徒側からあまり意見がなかったように感じていたが、今年の年会では信徒の中からも活発な意見が出された。そういう点では教団もやっとよちよちながら一人歩きをはじめた段階にきたと思う。そして今後更に各教会の信徒間でもキリストにある兄弟姉妹として自由に意見を交換し合えるような機会が与えられ、交わりが持てたら幸いである。そして現在の若い兄姉達が信仰をもちつづけ、成長しつづけて行くことが教団を大きく成長させていくことになると思う。

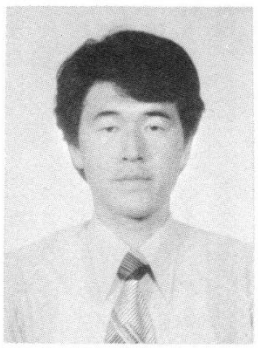
最後に、この二十五年の間私達の教団を守り支え、ここまで導いて下さった生ける主と牧師、宣教師の諸先生方に心からの感謝を献げるとともに、過去の誤ちを繰り返さないように悔い改め信仰をもって祈りつつ前進していきたいと願うものである。

（ハバクク第三章十七―十八節）

「教団と私」

石原敏郎

八年前に主の導きにより、秋津聖契キリスト教会（現在、新秋津キリスト教会）へ初めて行った時、礼拝は四、五人の集会でした。それは家庭集会のようなものでした。その頃教団と言われても何のことかさっぱりわかりませんでしたが、伝道集会などで教団の協力を受けて、だんだんと秋津教会も多くの人の祈りに支えられ、教団のビジョンに加えられていることがわかって来ました。



大学二年の夏に、私は赤城クリスチャン荘で一ヶ月間働く機会を与えられましたが、他教会の先生方、信者の方々と会い、話し、祈ることができたのは、大変有意義でした。そこで教えられたことは、祈られているばかりでなく、教団のために、又、他教会のために祈らなければということでした。

昨年度行なわれた集中方式伝道では、教団内の教会と教会の関係が、更に深まったと思います。全

てがスムーズにいったとは言えませんが、これを通して学ぶことは多くあった筈です。集中方式伝道の成果は、与えられた決心者、求道者ばかりでなく、教団、各教会、各自の信仰の深まりにまで及んだことでしょう。イエス様は聖契教団を愛しておられ、すばらしい業を私達の目の前に示して下さっていると信じます。

高一の時に主を受け入れた私も、今年から社会人です。今は会社の実習で東京を離れているのですが、帰る度に教会内に若い人が多いなと感じさせられます。新秋津教会は今年で設立五周年、やっと五才です。若い筈です。一方、教団は25才。青年期で最も力のある時期です。しかし、それだけに悩みも問題も多い時です。〝祈り合う〟教団と教会の意識の高まりを特に大切にしたいと思うのです。

教団と教会の関係はどうあるべきか、などという問題は、私にはむずかしすぎますが、しかし、この八年間でイエス様が私に教えて下さった事は、教団も教会も一人一人の信仰によって支えられているということでした。まず「私」の信仰の深まりが必要なのだという単純なものでした。そしてそれは、霊的な深い祈りによってイエス様の愛に導かれ、与えられるものです。今、私に、教会に、教団に必要とされているのは、このような単純な信仰の深まりなのではないでしょうか。



教団施設

聖契赤城クリスチャン荘

一九六三年初秋、神の奇しき導きの下、宣教会は赤城山頂にキャンプ場を購入することが出来た。翌年夏より英語、小学、中学、成人の諸キャンプが開催され、長らく使用していた箱根の施設から離れて〝定住の地〟を見出すことになった。

数年に一度ずつの割合で施設の増改築が米国福音カベナント教会よりの献金などで行われ、必要備品も有志の献品により与えられていった。

一方、キャンプへの参加者数は、教団内外合わせて増加し、利用回数も大巾に増えていっている。特筆すべきことは、多数の人々が、キャンプを通してイエス・キリストの福音を聞き、信じ、新しい生涯へと変えられていったことである。

創設以来、エンゲマン、上原両師が特に運営面で労をとってきており、その他の宣教師、信徒及び神学生、米国カベナントの兄姉たち、最近では短期宣教師たちが、スタッフ、カウンセラーとして奉仕にあたった。なお教団の教職も諸キャンプで講師、ディレクターとして用いられてきている。

一九七四年からは毎年六月第三主日をキャンプ・サンデーとし、教団諸教会からの献金がなされることになり、また第一回キャンプ理事会（理事長、松本芳三師）が八月に開かれた。

一九七七年夏からは運営責任が宣教師側から日本人側へ移管される可能性が強くなっており、常住者選定によるキャンプ場の常時使用、スタッフの確保、カウンセラーの訓練など、いくつかの課題に真剣に取り組むことを求められている。

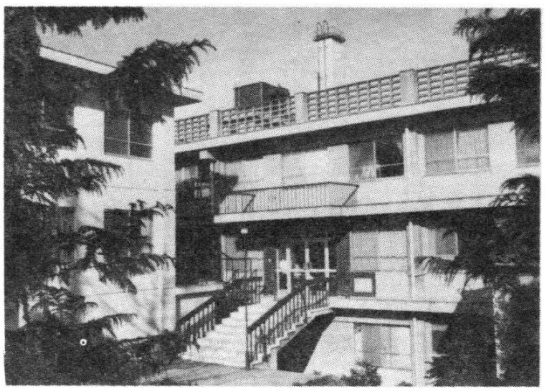
本校は一九五二年九月に、日本カベナント宣教会（一九六九年に日本聖契キリスト教団と合併）によって創立された。開校当初は、聖書科だけであったが一九五七年四月に神学科が併置され、さらに、一九七三年四月より、学校制度の全面的改革がなされた結果、昼間部と夜間部併置の「基礎科」、および「専門科」が誕生した。また、一九七六年四月よりは、「研究科」も追加され、多方面のニードに答える態勢が出来上がった。校舎について言えば、現在の鉄筋コンクリート三階建ての本館は、一九六七年に、同じく三階建てのチャペル・男子寮は一九七一年に完成したものである。本校は日本聖契キリスト教団の所有であるが、日本聖約キリスト教団、同盟福音基督教会と協力関係を持っている。

なお、本校は開校当初より、多くの諸教団、諸教会所属の教師と学生を迎え入れ、暖かい交わりを持って来ている。

卒業生の総数は現在で、聖書科および基礎科五四名、神学科および専門科一〇四名、合計一五八名である。その中三九名が日本聖契キリスト教団へ、一五名は日本聖約キリスト教団へ、同盟福音基督教会へは十一名が奉仕のために遣わされて行った。

一九七三年に新制度になってから、学生の数は増加し、一九七六年四月には、男子二四名、女子八名の正規生、男子十一名、女子十名の聴講生、合計五三名となった。日本における急速な教会成長のために備えるべく、神がこれらの学生をお立てになったと我々は確信している。もう一つの健全な徴候は、神学校が外国からの財政援助に全面的にたよっていたところから、一九七五年の収入の三分の二は日本国内の各方面より入るというまでになったことである。

聖契神学校



我々の祈りは、この神学校が神の御心の中心にあるようにということである。御自身の体なる教会の頭であられる主が、日本において御自身の御業を行われるからである。

開校以来、奉仕されたスタッフは次の通り。

○校　長
ウィリアム・リグマーク師（五二年～六九年）。レオナルド・ピーターソン師（六九年～現在）

○校長代理
L・ピーターソン師（五七年～五九年）
メルボルン・メトカーフ師（六三年～六五年）

○教務主任（学監）
土山喜一師（五二年～五五年）
堀川　勇師（五六年～六四年）
大山武俊師（六六年～現在）

○女子寮舎監
キャロル・ジョンソン師（五二年～五三年）、ルース・クリスターソン師（五三年～五五年）、バニー・ジョンソン師（五五年～五八年）、堀田久子師（五八年～六〇年）、別所幸子師（六〇年～六三年）、エミー・ミュラー師（六四年～七四年）

なお現在の理事会々長は石田和男師、運営委員会のメンバーは、L・ピーターソン師、大山師、E・ミュラー師、伊藤師の四名である。

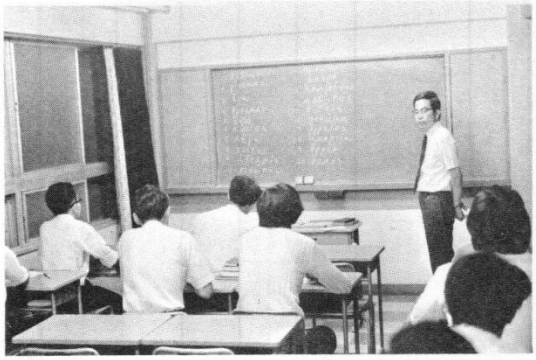

聖契神学校
COVENANT BIBLE SCHOOL
MEGURO COVENANT CHURCH 目黒カベナント教会
SUNDAY SCHOOL
WORSHIP SERVICE
YOUNG PEOPLES MEETING 青年会
EVERYBODY WELCOME どなたも御自由においで下さい



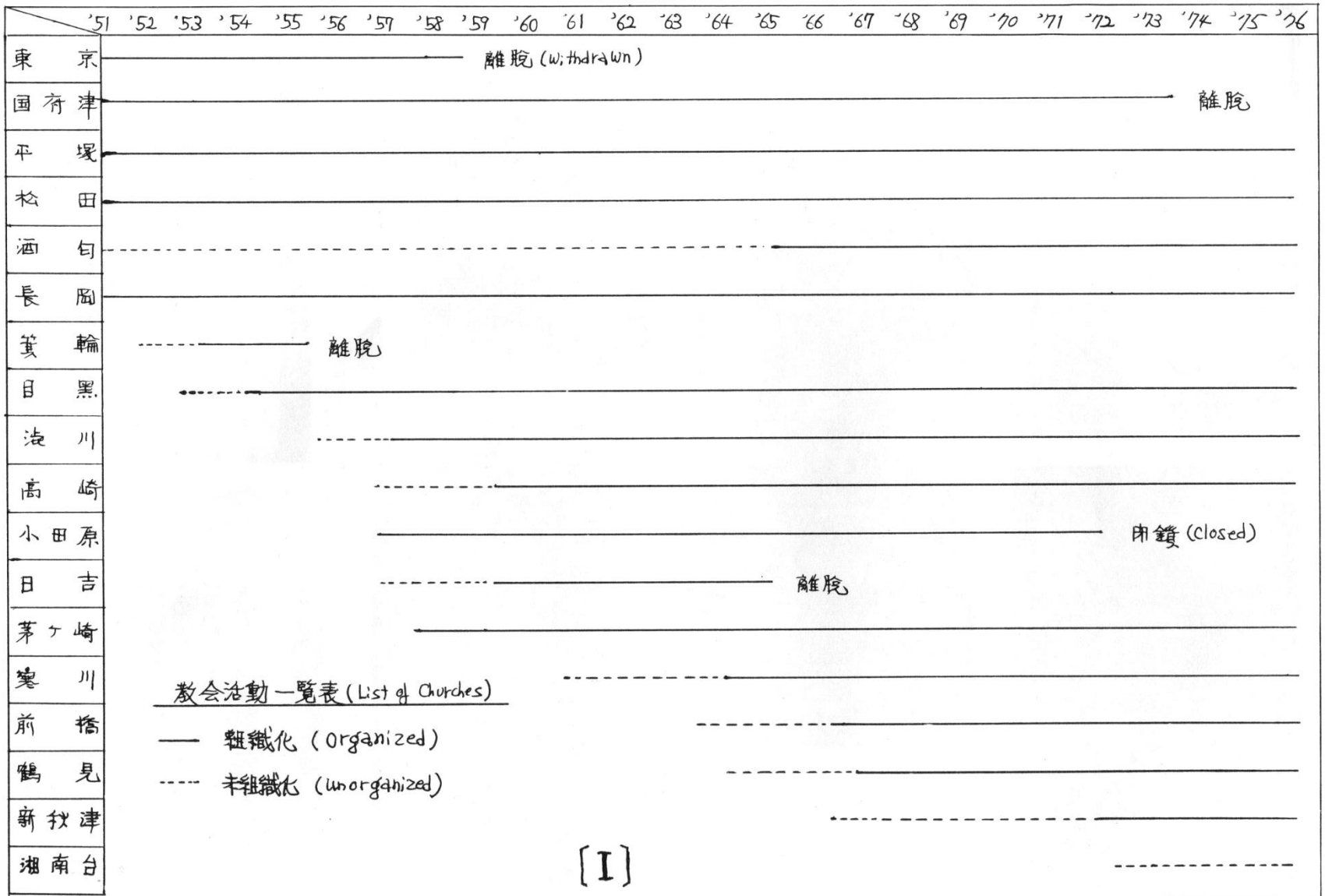


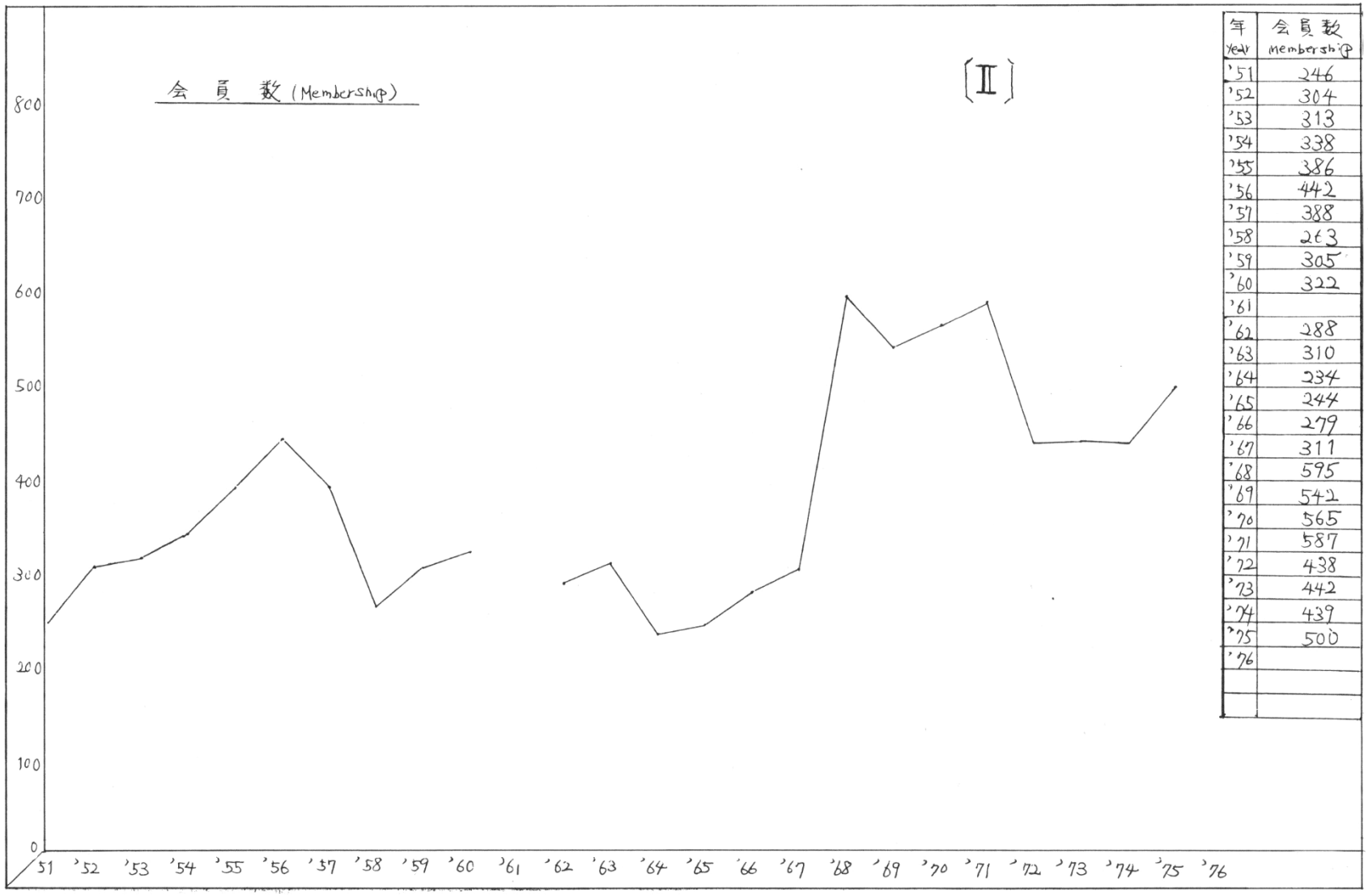









'51 '52 '53 '54 '55 '56 '57 '58 '59 '60 '61 '62 '63 '64 '65 '66 '67 '68 '69 '70 '71 '72 '73 '74 '75 '76
東京
国府津
平塚
松田
酒匂
長岡
箕輪
目黒
池川
高崎
小田原
日吉
茅ヶ崎
寒川
前橋
鶴見
新秋津
湘南台
離脱 (withdrawn)
離脱
離脱
閉鎖 (closed)
離脱
教会活動一覧表 (List of Churches)
組織化 (Organized)
未組織化 (unorganized)
[I]



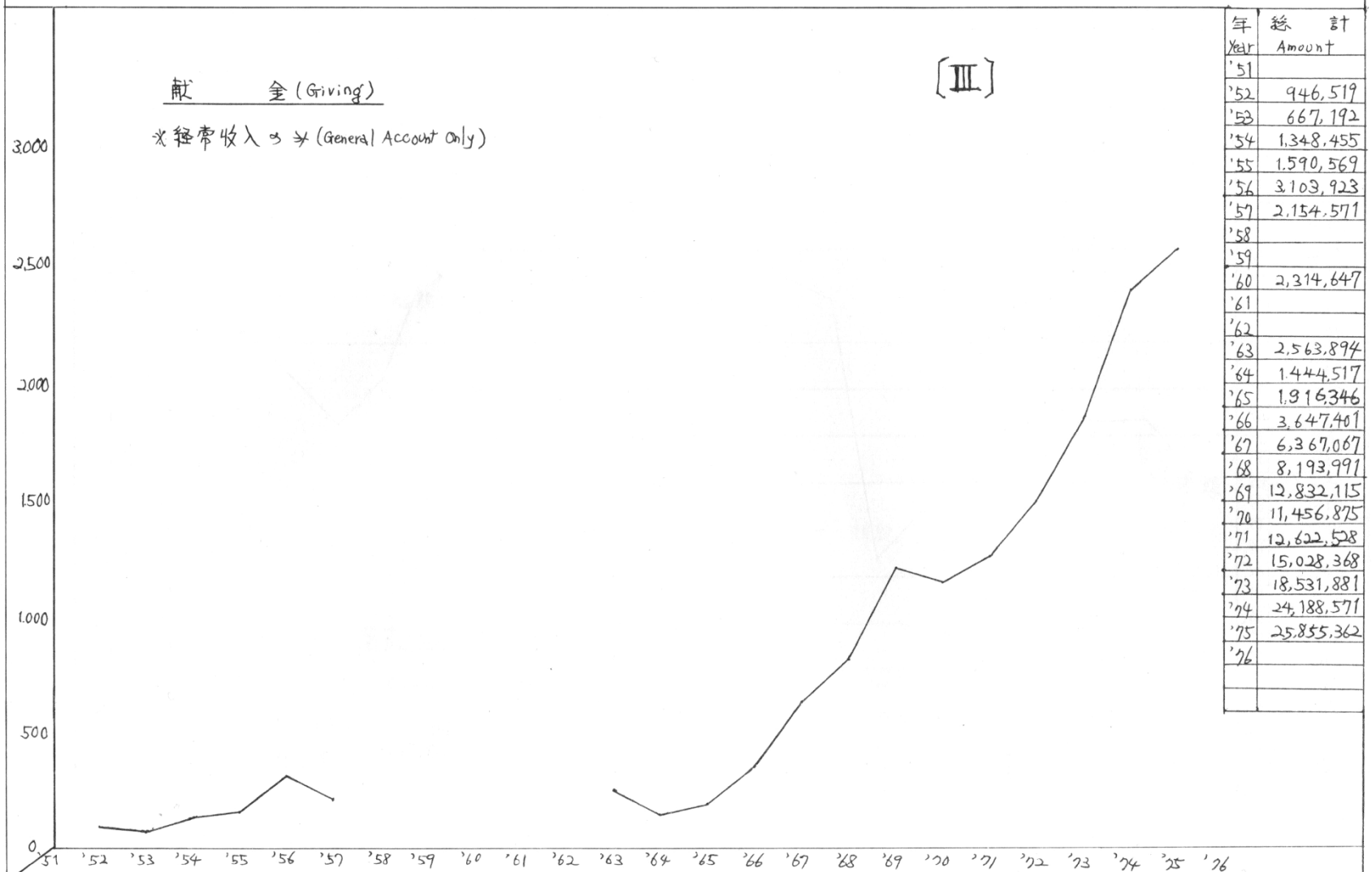
年 Year	会員数 Membership
'51	246
'52	304
'53	313
'54	338
'55	386
'56	442
'57	388
'58	263
'59	305
'60	322
'61	
'62	288
'63	310
'64	234
'65	244
'66	279
'67	311
'68	595
'69	542
'70	565
'71	587
'72	438
'73	442
'74	439
'75	500
'76	

単位　百万円（Million yen）

〔Ⅲ〕

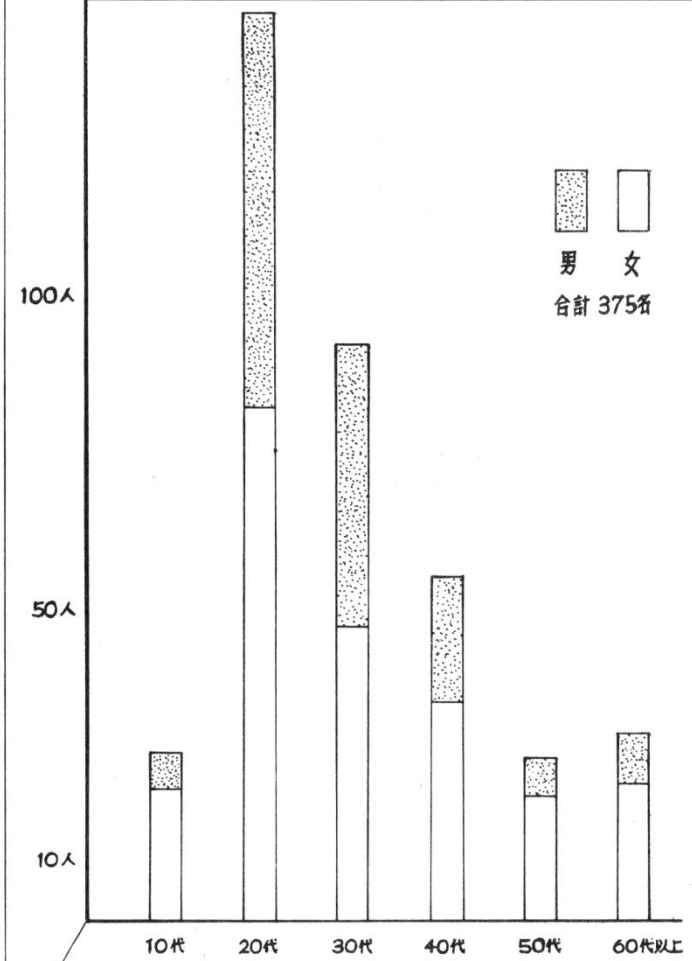
献　　金（Giving）

※経常収入のみ（General Account Only）

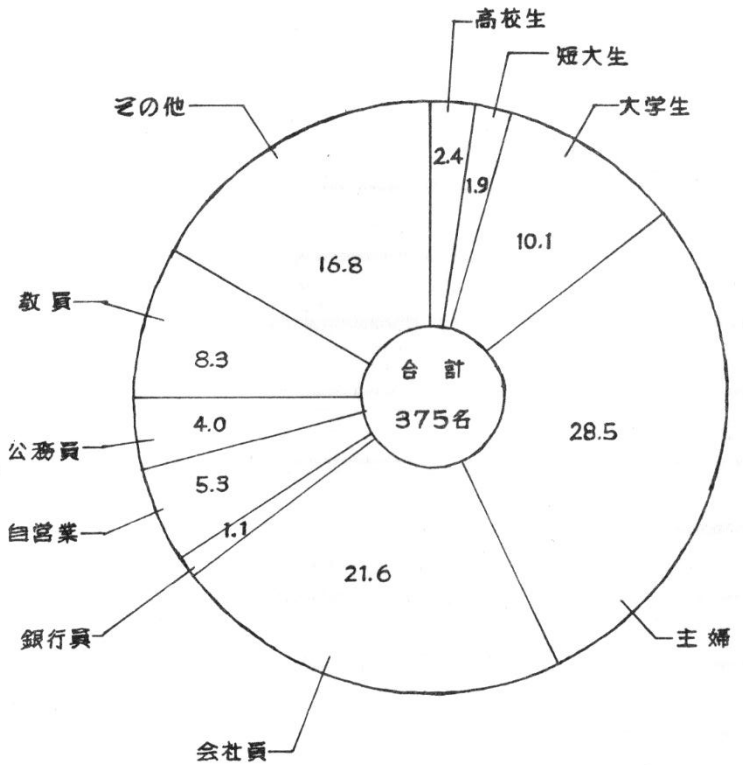


年 Year	総　計 Amount
'51	
'52	946,519
'53	667,192
'54	1,348,455
'55	1,590,569
'56	3,103,923
'57	2,154,571
'58	
'59	
'60	2,314,647
'61	
'62	
'63	2,563,894
'64	1,444,517
'65	1,916,346
'66	3,647,401
'67	6,367,067
'68	8,193,991
'69	12,832,115
'70	11,456,875
'71	12,622,528
'72	15,028,368
'73	18,531,881
'74	24,188,571
'75	25,855,362
'76	

陪餐会員年代 (Age levels of Communicants)



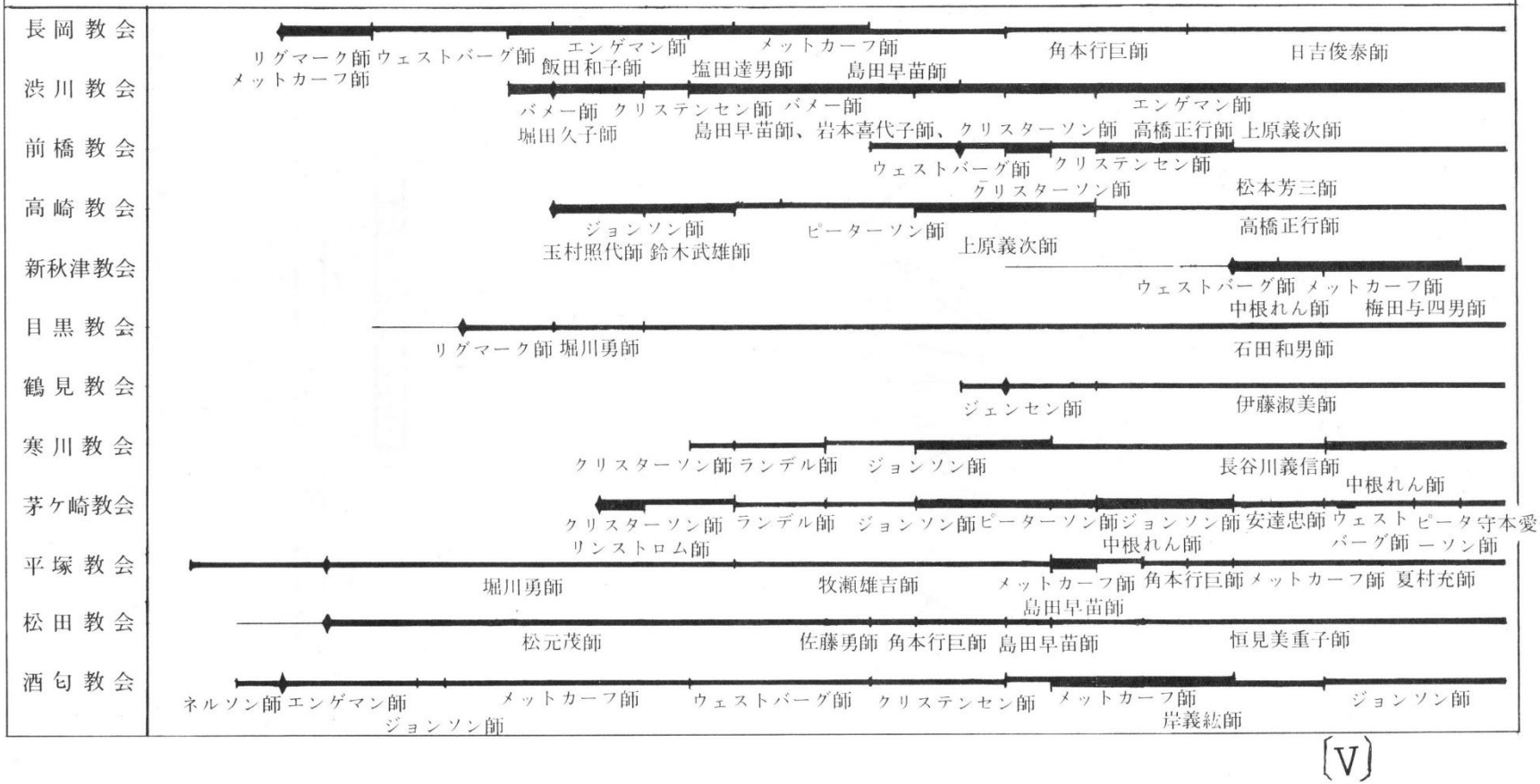
陪餐会員社会層 (Social Structures of Communicants)



※ 各教会よりの報告に会員の種別に相違があり他の報告書の教団会員総数と多少の違いがあります。

〔IV〕

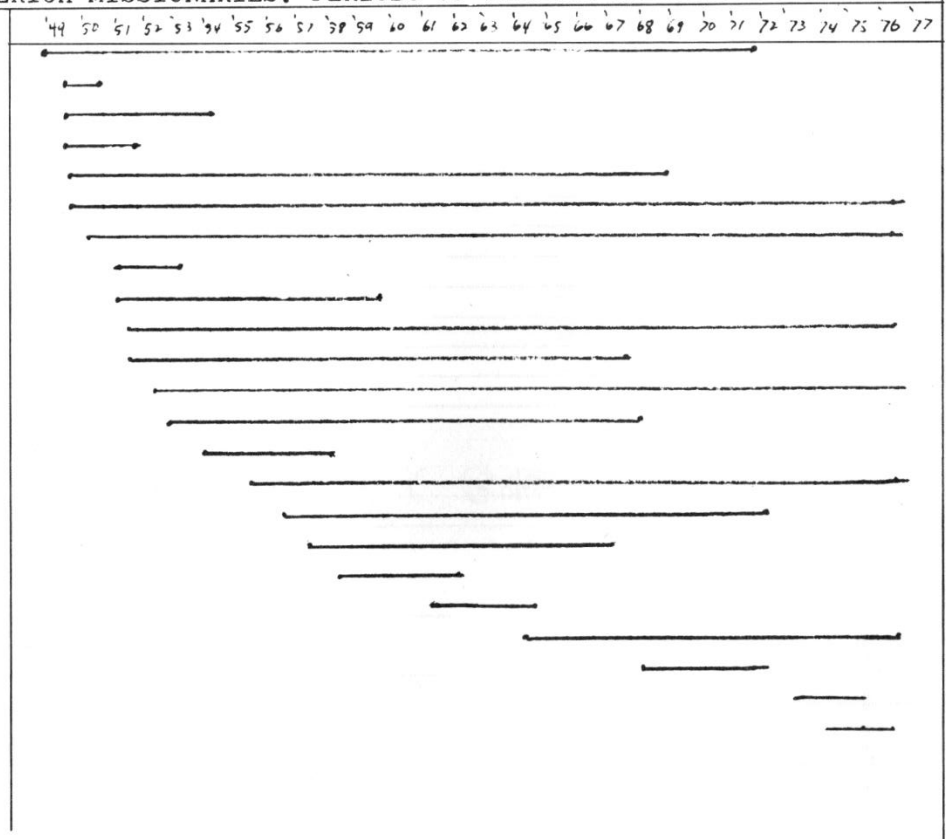
教会と奉仕教職者 (Organized Churches and Workers)



〔V〕

米国福音カベナント教会 宣教師奉仕期間一覧表
EVANGELICAL COVENANT CHURCH OF AMERICA MISSIONARIES. PERIODS OF SERVICE IN JAPAN

Robert and Virginia Verme 1/23/49
Edward and Mildred Nelson Sept。49.
Ruth Edlund "
Otelia Hendrickson "
William and Virginia Rigmark 11/12/49
Melbourne and June Metcalf 12/24/49
Harry and Eleanor Engeman 7/24/50
Judith M。Peterson 1950
Shirley Lindstrom 5/21/51
Gordon and Lucille Johnson 9/9/51
Ruth Kristerson 9/9/51
Harry and Gladys Westberg 8/26/52
Louis and Iris Jensen
Bonnevieve Johnson 3/31/54
Leonard and Grace Peterson 10/26/55
Ernest and LauraBelle Christensen 10/26/56
Grace V。Nelson 8/29/57(CAJ)
Kenneth and Joyce Lundell 8/16/58
Harriet Quarnstrom (CAJ)
LeRoy and Caroline Peterson 8/ /64 (CAJ)
David and Joyce Roth 5/27/68 (CAJ)
Kenneth and Adina Wicklund 4/ /73 (JSSU)
Lyle and Karen Pownell。Summer 1974 (CAJ)



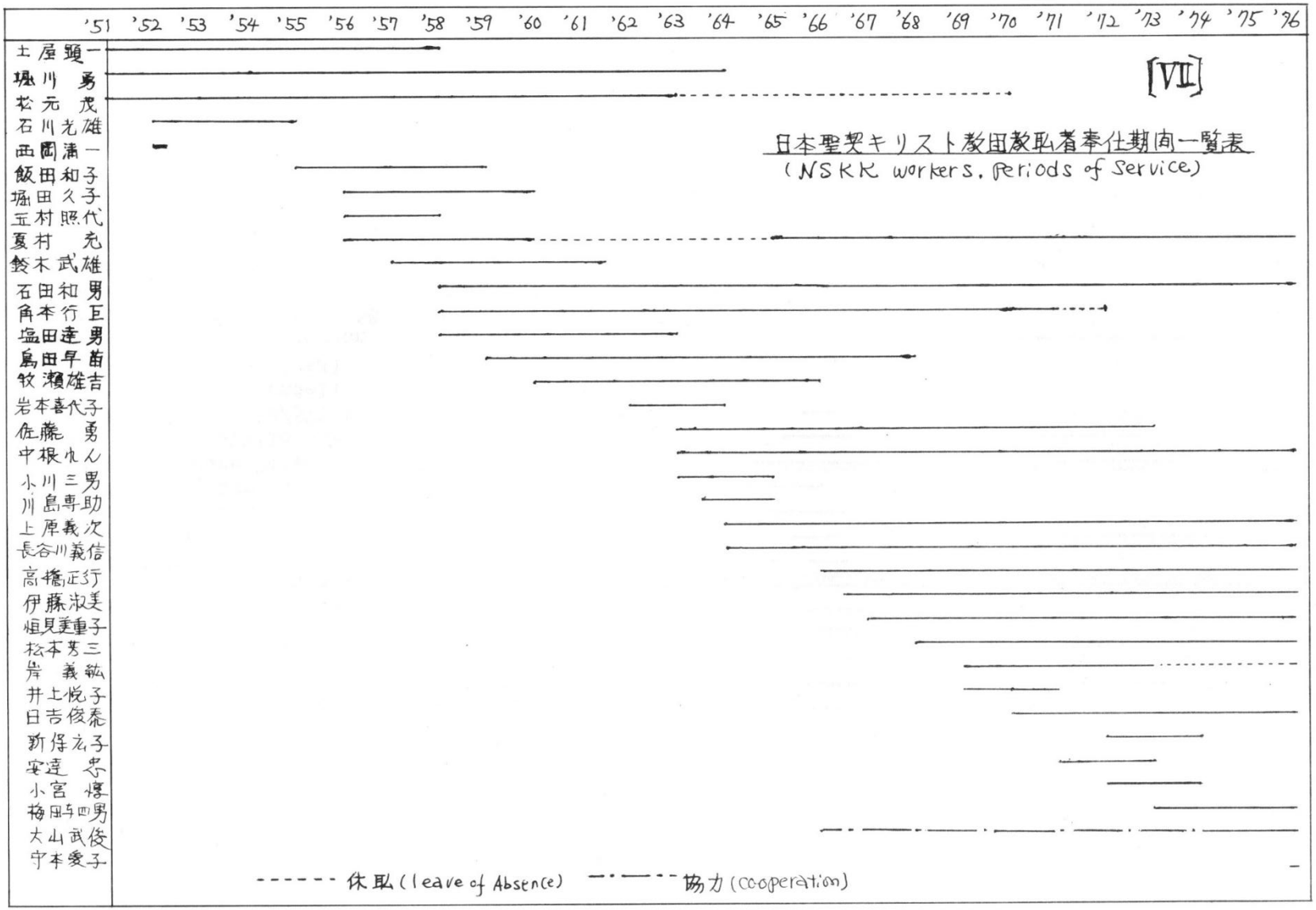
CAJ=Christian Academy in Japan （クリスチャン・アカデミー）
JSSU= Japan Sunday School Union （日本日曜学校助成協会）

[VI]

[VII]

日本聖契キリスト教団教職者奉仕期間一覧表

(NSKK workers. Periods of Service)



統計解説

「グラフはストーリーを語る」といわれているが、日本聖契キリスト教団の場合も正にその通りである。会員数、献金のグラフにおいて資料のない年があったことは、事務整理の不備を示し、二図は、五〇、六〇、七〇の各年代に起きた離脱のつめあとを如実に物語っている。興味深いのは四図の陪餐会員の社会層で、半数が主婦、会社員で占められていた半面、学生層が十五パーセント弱であったのには、意外(?)でもあった。年代に関しては、二、三十代が多いのは若い教団として当然としても、十代が少いのは、今後の伝道方策にも一考の余地があるのではないだろうか?

五~七図に見られる二つの現象は、教職者の教会間の異動が激しかったことと、教団での奉仕期間の短かいケースが多かったことである。

励まされることは、インフレの影響とはいえ、献金額の増加と会員数の持ち直しという事実で、なおも上昇カーブを描き続けさせていきたいものである。

将来への展望

パウロは「うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み……目標を目ざして一心に走っている」(ピリピ3ノ13~14)といっている。教団の過去をふり返ってみると、神に感謝すべき多くのことがある。それと共に恥かしい経験もあった。しかし、問題は、これからのわれわれの態度にある。

神がわれわれのために持っておられる目標に達しないでよい、という理由はどこにもない。神は、もしわれわれが従順ならば、力と知恵を与える、と約束しておられる。

われわれが目標とするものは、

一、神の栄光を表わすこと(エペソ1ノ12)、

二、キリストの体を建てあげること、(質、量両面における成長)

三、福音宣教による多くの人人の救い、

四、世の光となること、であり、この目標の達成のために、

一、祈りと聖書研究により、神ご自身と、メッセージに対するより深い知識を持つこと、

二、生活の全領域においてキリストに従順であること、

三、主の愛に満され、あらゆる手段を用いて積極的に伝道すること、をなしていこう。

キリストがよみがえり、神が御座におられる故に、将来は明るい。主に従おう!

日本聖契キリスト教団地方教会一覧表

1976年７月16日現在

No.	教会名	〒	住所	電話	教職者
1	長岡聖契キリスト教会	940	新潟県長岡市学校町１－10－31	0258－32－8346	日吉俊泰
2	渋川カベナント教会	377	群馬県渋川市南町2570	02792－2－1080	上原義次　H・エンゲマン
3	前橋聖契キリスト教会	371	群馬県前橋市元総社町152	0272－51－5249	松本芳三
4	高崎カベナント教会	370	群馬県高崎市飯玉町91	0273－61－3531	高橋正行
5	新秋津キリスト教会	189	東京都東村山市秋津町５－25－２	0423－94－5076	梅田与四男
6	清瀬聖契キリスト教会	180－04	東京都清瀬市中里３－899	0424－92－0883	M・メットカーフ
7	目黒カベナント教会	153	東京都目黒区中町１－34－11	03－712－5074 03－710－7353	石田和男
8	鶴見聖契キリスト教会	230	神奈川県横浜市鶴見区北寺尾１－16－７	045－572－0857	伊藤淑美
9	湘南台キリスト教会	252	神奈川県藤沢市円行字四辻67	0466－43－0412	
10	茅ヶ崎聖契キリスト教会	253	神奈川県茅ヶ崎市ひばりが丘７－23	0467－86－1166	守本愛子
11	寒川キリスト教会	253－01	神奈川県高座郡寒川町岡田1916	0467－75－0542	長谷川義信　中根れん
12	平塚聖契キリスト教会	254	神奈川県平塚市松風町７－９	0463－21－4201	夏村充
13	松田聖契キリスト教会	258	神奈川県足柄上郡松田町惣領2062	0465－82－5858	恒見美重子
14	酒匂キリスト教会	256	神奈川県小田原市酒匂３－13－８	0465－47－3282	G・ジョンソン
	聖契神学校	153	東京都目黒区中目黒５－17－８	03－712－8746 03－713－9106	大山武俊　L・ピーターソン
			男子寮	03－710－8651	
			女子寮	03－710－8652	
	聖契赤城クリスチャン荘	371－01	群馬県勢多郡富士見村赤城山大洞	0272－87－8538	
	小田原クリスチャンセンター	250	神奈川県小田原市城山１－６－19	0465－34－2796	
	新座宣教師館	352	埼玉県新座市愛宕３－11－38	0484－77－4515	リロイ・ピーターソン

日本の救霊のために労した宣教師と家族











編集後記

一九五一年五月、東京神田のY・W・C・Aで、日本カベナント教会の設立式が行われてから早くも四半世紀が過ぎ去った。創立二十五周年を迎えるにあたり、「教団の歩み」を記念アルバムに作成する権限が、さる三月の責任役員会で、機関紙委員会に与えられた。

ピーターソン委員は米国福音カベナント関係、展望と写真を、梅田委員は信徒によるあかしと統計を、伊藤委員は歴史、統計、ほん訳をそれぞれ分担し、資料の収集、整理にあたった。

主要な資料としては、各教会の写真、資料と共に、「**Covenant Missions in Japan**」（リグマーク著）、「聖契タイムス」、「教団年会報告書」、「教団責任役員会議事録」などを使用し、また教職、信徒の方たちからの証言も加えた。

紙数の関係で掲載できなかった資料もあったことを了承して欲しい。

特にこのアルバムのために、実に貴重な写真をこころよく貸与された教会、多忙の中を資料を提供された諸先生方、あかしを寄せられた兄姉たちに、厚くお礼を申し上げたい。なお写真整理、年表作製などの労をとられた深田事務局員にも謝意を表したい。

過去を語り、現在を示すこのアルバムが、将来の教団の成長、発展のための一助として、用いられるならば幸いである。

日本聖契キリスト教団創立二五周年出版

記念アルバム

編集　教団機関紙委員会
発行　一九七六年八月
印刷　新生運動